

## 教育随想

# ふれあい



## M夫とのこと

佐藤 八重

帰宅すると玄関に一通の郵便があった。手に取った瞬間、私は思わず「万岁」を叫んだ。

忘れてもないM夫からの結婚式の招待状である。余白にはM夫の直筆のボールペンの添え書きがあった。

「先生、ぼくも結婚することになりました。ぼくは二十歳、K子は十九歳。こんなこと言うと、のろけているみたいですが、K子は、ぼくよりも人間がずつとずつとうわてです。いい人と巡り合わせたと思っています。先生、必ず来てください。待っています」

当時と変わらない、たどたどしい文字だが、偽りのない言葉がうれしかった。

M夫は、私が前任校で学級担任をした生徒である。粗暴で、なにか問題が

起こると必ずといってよいほど、なんらかのかわりを持つといった生徒であった。学校では、このM夫に関する指導事例を研究し合い、指導についての共通理解をもってきたが、とりわけ校長先生、教頭先生、担任のS先生の心労は大変なものだった。

その彼が三年生になった。担任のS先生は一身上の都合で退職され、その後任が私であった。それまで、一年生を担任していた私は、予期しなかっただけに、かなり動揺した。それまでの学級に対する愛着もさることながら、M夫が所属する学級ということがまず抵抗であった。けれども、その気持ちも、かなり快く薄らいだ。それは、校長先生に見せられたM夫の手記のせいであつた。

「おれは今月(三月)になって一度も学校を休んでいない。山学校もしていない。でも、みんなおれのことを遠巻きに眺めている。おれが、なにかやらないのを珍しいとでも言うような顔をして……でも、佐藤先生は、おれのことをさんづけで呼んでくれる。だからおれはあの先生に会うとうれしくなる」特に意識して接してきたわけではなかったが、この手記は私に決断を与えた。

こうして、M夫の学級担任としての学校生活が始まった。M夫には、まったく白紙の状態で接したが、彼も他の生徒と同様に別段変わったふうもなく日々を過ごした。平穏な毎日だった。ところが、ゴールデンウィークのあけた五月のある日、彼は登校しない。早速、家庭に連絡すると、彼が置き手紙を残して家出をしたとのことである。そして、駆けつけた私に、母親の手渡したM夫の手紙は、私の気持ちを動転させた。

「先生すみません。おれは、おとといバイクに乗って警察につかまりました。おこられて家へ帰る途中、腹いせにやめていたたばこを吸いました。やっぱりおれはだめな生徒です。先生は、おれの昔のこと知っていながら、黙っているの、おれ知ってました。だから、おれは先生が大好きです。おれは絶対に悪いことしないと、心に決めていたのに、土方の人とこんなことをしてしまいました。父ちゃんや母ちゃんにも

すまないと思っています。先生、バスで通うの大変でしょう。体に年をつけてください。」

涙で、しばらく言葉にならなかった。——幸い、この事件はM夫の父の友人からの通報で、M夫は無事に保護された。

あの日を境にしたように、M夫は大きく変わった。M夫の手記に見られるように、彼の持つ素直さ。それが、ふとした動機から、ゆがんでいく人間のもろさ。そして、M夫によって教師の使命感に目覚めた己の心の不明を私は恥じた。

私は、M夫の結婚式を一日千秋の思いで待っている。七年前の童顔がまだ残っているだろう彼が、中学校を卒業した後、大工の仕事に懸命に取り組んでいる姿を想像しながら。

現任校に来て三年になるが、毎日がんばるとうに楽しい。校長先生を中心とする三十名の職員の和は、すべての教育活動に及び、生徒も生き生きとしている。校長先生のモットーである「実践力のある教師」は、気軽な授業研究の展開にも実証される。

M夫との貴重な出会いの経験を大切にして、女教師ならではの力量を大いに発揮していこう、と努めているころである。

(石川郡石川町立石川中学校教諭)